

入選

テーマ…医療と福祉、わたしの体験 「福島の人々に会って考えたこと」

東京都・東洋英和女学院高等部1年 田幡夏海

私は、この夏に参加した学校の修養会で忘れられない体験をした。東日本大震災と原発事故を、その身に直接受けた人たちに出会った。彼等の姿とその口から聞く言葉はニュースなどとは全く違い、他人事では済まされないという思いをひしひしと感じさせるものだった。

私の通う高校は「奉仕」の精神を大切にしている。これは、身近な人のために自分が仕える、という意味である。よって常日頃からボランティア活動は盛んで、その一環として今年の夏に修養会が開かれた。今回は初めて福島県南相馬市の保育園児を招待することになっていた。名前は「修養会」だが、内容は「保育園児と一緒に遊ぶ宿泊行事」である。私は福島の子にはぜひ会ってみたかったので、この修養会に参加することにした。

修養会のプログラムには保育園児たちが眠った後に中高生が福島の方々からお話を伺う時間があった。そこで、驚くべき話を伺った。

話してくださったその方は、介護や福祉の現場で働く女性だった。震災直後は危険を回避するため、何とか避難所に行かねばならなかったが、介護の必要な方たちを避難所に連れて行くのは大変で、避難所への到着も遅くなってしまった。到着した時には避難所の真ん中しか空いておらず、介護の必要な方々や車いすの方たちは四方から視線を浴びる部屋の真ん中にいなくてはならなかった。さらに、高齢者は夜中にトイレに行くことがあるが、どうしてもドアの開閉など音が立ってしまふ。避難所の方たちは最初は寛容で、「ああ、いいですよ」と言ってくたさるが、一週間もすると、「黙れ!」「静かにできないのか!」と言われてしまい、一か月は避難所にいられなかったそうだ。また、精神障害の方は不安定になると自傷行為などが現れることがある。そ

れらに対する理解は浅く、本当に避難所などいられない、とその方はおっしゃった。さらに、親戚筋を頼ってもやはり限界があり、「勘弁してくれ」と二か月もつかどうかだという。

さらに、当時自宅にいた聴覚、視覚に障害を持った方たちの話も伺った。視覚障害の方は、地震によって物の配置が変わってしまい、自宅の中で歩くこともままならない。聴覚障害の方も、「屋内退避」は分かっただもののほとんど状況を飲み込めず、家の中で縮こまっていることしかできなかった。結局一か月程たった頃、心配になって自宅に向かった施設の職員が発見して助かったというのだ。

災害発生時のために考えられていたマニュアルでは、「体の丈夫な人は何とでもなる。まずは障害者や高齢者など、避難が困難な弱者を優先させよう」ということになっていたらと聞く。だが、実際にはその反対だった。弱者は逃げ遅れ、やっと着いた避難所からも出ていけなくてはならなかった。

実は、私の母は社会福祉士である。かつ父は病気により左半身に麻痺がある。軽度であるが、身体障害者だ。さらに我が家の深夜にはたびたび母の友人で精神障害を持っている方から悩みの電話がかかってくる。このため私は、世間一般のなかでは障害者と身近な方ではないかと思う。それでも知的、発達障害の方に対しては、不慣れさから怖いと感じてしまふ。

私は今回の話を伺って、人々が障害に対して「よく知らない」「よくわからない」という思いから「怖さ」を感じ、それが「勘弁してくれ」につながってしまっているのではないかと感じた。だが、私は「よく知らないから」「なんとなく怖いから」を理由に理解することを止めてしまふ人間にはなりたくない。私は、私たちが本当の意味で「共に生きる」ために、つまり、「当たり前」の軸が違つ人々を同じ社会の一員として認め、当たり前と一緒に暮らせるようになるために、自分でできることを考えながら日々を過ごしていきたいと思ふ。